第3種郵便物認可

朝日新聞

一字一筆 静岡の今

黄色の柿 冬の訪れ

黄金色の柿畑＝磐田市、全日写連・中田美智雄さん撮影

初冬の静岡の代表的な風物詩の一つは、富士山を背景にして富士川の川原を赤く染めるサクラエビの天日干し風景だった。ところが今年は駿河湾のサクラエビ漁に異変が発生、例年の秋漁が中止という事態になった。

赤いサクラエビに代わって、晩秋から初冬の風物詩に躍り出たのは黄色の柿である。柿農家によれば今年は実りが豊かな「表年」で、黄金色に埋め尽くされた柿畑も多いという。

「次郎柿」の産地で知られる森町を訪ねた。町役場によれば、同町の住人松本治郎吉が江戸時代末期（1844年）に近くの太田川で見つけた幼木を自宅に植えた、次郎柿発祥の地である。種が種を生んで、この地域で大切に育てられた「次郎柿」は味も形も見事な果実に成長し、明治末期に皇室に献上された。やがて「森町の次郎柿」として全国に知られるようになり、地元JAによれば現在約100戸の農家が20㌶で約400㌧の次郎柿を生産している。今年も11月13日、厳選された120個が平成最後の献上柿として105回目の二重橋を渡った。

森町に隣接した磐田市敷地に入ると、通称ころ柿と言われる渋柿「立石」（たていし）が収穫と干し柿造りの最盛期を迎えていた。柿の収穫は機械化ができない。農家総出で豊作の柿を一つ一つ、切りハサミで切っては籠に入れていた。

この季節を「朔風（さくふう）葉を払う」という。「朔」は北という意味で、朔風は木枯らしのこと。北風、木枯らし、空っ風。初冬に吹く冷たい風が、木々の葉を払い落とす頃のことを表現する言葉である。葉は吹き飛ばされても、黄色や赤い実が残る柿は暖かで、いとおしい。

最後まで木に残った柿を「木守柿」（きもりがき）と言い、来年の豊作を祈るおまじない、と子供のころ母から教えられた。

畑の柿は、やがてつるし柿となって初冬の風物詩となる。

（前静岡県監査委員・富永久雄）